

第4回「学校支援地域本部事業運営協議会」議事の概要

1 日 時

平成21年2月17日（火）午後1時半から3時半まで

2 場 所

県庁6号館621号室

3 出席者

委員	崎山 実	（宮崎市立住吉南小学校）
委員	大山 茂	（清武町立清武中学校）
委員	松山孝太郎	（県立延岡工業高等学校）
委員	高木かおる	（県PTA連合会）
委員	池田 隆行	（県老人クラブ連合会）
委員	臼間 守	（退職校長会）
委員	尾崎 太朗	（住吉地域総合型スポーツクラブ）
委員	山口 晃司	（JA宮崎中央会）
委員	中原 邦博	（南那珂教育事務所）
委員	酒匂 醸以	（宮崎学園短期大学・みどり幼稚園）
委員	高橋 利行	（宮崎大学教育研究・地域連携センター）

合計11名

県生涯学習課 : 課長、上川路補佐、島名副主幹、根之木社会教育主事

4 開 会（日程説明等）

5 説 明（事務局）

※ 質疑

（委 員） コーディネーターの調査はいつ実施したのか。

（事 務 局） 1月の下旬に実施した。

（委 員） 中学校区を対象にして調査したのか。

（事 務 局） 各コーディネーターを対象にして実施した。実行委員会の担当者を通じて配布してもらい、直接回答を当課に送ってもらった。

（委 員） 学校支援ボランティア活動の中心は、学習支援活動なのか。

（事 務 局） そうである。文部科学省も学習支援活動の拡大をねらっている。

（委 員） 普通に考えると、学校側が教科にどう結びつけるかを明確にしておかなければ、ボランティアを募るのは難しいのではないかと。学校側がニーズを示さないと学習支援活動にはシフトしていかないのではないかと。

6 協 議

- (委 員) 今回は事業の成果と課題について協議していくが、委員の発言された本事業のねらいにシフトするというのは課題の一つである。
- (委 員) その通りだと思う。かけ算九九のトレーニングは、保護者の活用も可能である。住吉地区では、教職員に対してどの教科でどんな人をどういうふうに活用したいのかを調査し、ボランティアの募集を行っている。次年度からは人材活用も軌道に乗る予定である。しかし、教職員には外部から人が入ってくると抵抗感のある者もいる。
- (委 員) やりにくいのか、初めから取り組まないのか分からないが、教科等の学習支援活動に全く取り組んでいない本部がある。各教科の退職教員を取り込んだ成功例があるとよい。どんな教科でも取り組めるような体制、人材の掘り起こしが必要ではないか。
- (委 員) 一般の方が授業に入ってくるのは難しい。昼休みに鉄棒の補助をするなどの支援の仕方はどうか。泳げない子を集めて練習させると泳げるようになる。夏季休業中にボランティアを集めて指導することもできる。
- (委 員) 授業のどこを手伝うのか、学校に示してもらわないと分からない。前提に気軽さがないと難しい。ボランティアがやりやすい、何をするのかが分かりやすいことが大事ではないか。
- (委 員) 教員が子どもと向き合う時間が増加している。登下校指導によって間接的に教員の負担軽減につながっている。今の関わり方でも十分ではないか。例えば、理科で漁師が天気図の見方を指導するなど、直接的な支援と間接的な支援に分けて考える必要があるのではないか。
- (委 員) やりやすいところからやっていき、その中で体制づくりを行い、その中からノウハウを見つければよい。やっていくことで、いろいろな糸口が見えてくるのではないか。
- (委 員) アンケートでは、学校支援活動のおかげで、時間にゆとりができ、子どもと向き合う時間が増えたというような具体的な質問を設定することで、本当の成果が分かるのではないか。
- (委 員) 評価の在り方として、点数が上がったかどうかだけではなく、興味関心が高まった、あまり好きではなかった教科が好きになったなど情意面の評価も考える必要があるのではないか。
- (委 員) ボランティアの調整組織が必要ではないか。学校の先生の業務が増えては元の本阿弥になる。
- (委 員) 窓口担当教員について、各学校の現状はどうか。
- (委 員) 住吉地区はコーディネーターが3人いるので、それが調整組織になっており、教員の業務は軽減されている。
- (委 員) 清武中は教頭が窓口になり、コーディネーターと一緒に調整している。必要なボランティアについては、教員にアンケートをとっている。

- (委員) 企業との連携については、学科主任が窓口となっている。
- (委員) 窓口担当の配置は必要になってくると考えられる。これも課題の一つである。
- (委員) 事業の普及・啓発として、ボランティア募集のチラシを作成しているところが多いが、チラシの内容に差があるのではないかな。サンプルを作ると市町村は助かるのではないかな。
- (委員) 始めたばかりにしてはうまく行っているのではないかな。今後、学校支援の分野なども広がっていくのではないかな。
- (委員) 高齢者クラブをもっと活用してほしい。高齢者にはいろいろな技術をもった方がいる。学校はもっと高齢者クラブに呼びかけてほしい。
- (委員) 学校からのニーズを積極的に発信することも課題の一つである。
- (委員) 学校は、支援は必要だが本音では煩わしいと考えているようである。学校の意識改革が課題ではないかな。校長のリーダーシップが必要である。コーディネーターは、地域や人をよく知っていることが大事である。チラシづくりよりも足で稼ぐことが大切である。コーディネーターの研修では、情報交換とネットワークづくりが大切である。
- (委員) 学校のニーズに対し、ボランティアが足りない。個人情報絡むことが多いので、誰にでもは任せられない。退職教員が適当ではないかということで、高齢者クラブに依頼している。
- (委員) 学校長の経営方針の中に地域との連携を組み込むことも、事業を円滑に進める一つの方法ではないかな。
- (委員) 初年度ということもあり課題は多く出されたが、成果としては何かないかな。
- (委員) 本事業は学校の閉鎖性を打開する起爆剤となることが期待できる。
- (委員) 教職員の負担軽減が達成できている美郷町、国富町は本事業を十分活用できていると思われる。そのようなところが出てきたのが成果ではないかな。
- (委員) 次年度の方向性について意見を伺いたい。
- (委員) 意見がないようなので、先ほどの課題解決が方向性ということで考えたい。
- (委員) 次に、本協議会の進め方について意見を伺いたい。
- (委員) 質問だが、コーディネーターや学校の代表等の横の交流はあったのか。
- (事務局) 2回のコーディネーター研修会を実施し、意見交換の機会を設けた。
- (委員) 今後も縦の連携、横の連携を図ってほしい。
- (委員) 事業は広げていく計画なのか。広げるのであれば、モデル地区に発表してもらおうとも考えられる。
- (事務局) 広げていく方向で考えている。
- (委員) 宮崎は全ての地域自治区で取り組む計画であり、3年後には自立していくのではないかなと思われる。
- (課長) 本事業に取り組んでいない市町村の中には、3年後の予算措置が難しい

という理由で見送っている市町村もある。お金のかからない仕組みでの取組を促しているが、十分な理解が得られず苦慮している。国は、3年後も補助事業として推進していくようである。

- (委員) 本事業への保護者の関わり方はどうあればよいのか。この事業を理解すべきなのは親ではないか。事業をより効果的に進めていくためには、保護者の関わり方を考えていく必要があるのではないか。

※ 各委員の感想等

- (委員) 学校教育と社会教育の連携を図るよい事業なので、推進に努めたい。
- (委員) 教員が子どもと向き合う時間を増やす本事業に期待している。コーディネーターもがんばっているので、協力して進めていきたい。
- (委員) 専門高校は地域との関わりが一つの大きなテーマである。ここで協議されたことは勉強になった。
- (委員) 親の立場として、時間の質を高めることで本事業の後押しをしたい。
- (委員) 高齢者の役割を再確認した。今後も学校支援活動に積極的に関わってきたい。
- (委員) 本事業は軌道に乗りつつあり、今後が楽しみである。いろいろな会合の場で、退職校長会の会員に働きかけていきたい。
- (委員) スポーツクラブとして、いろいろな要望に積極的に関わってきたい。
- (委員) 将来的に共通のボランティアの人材バンクができるともっとよいのではないか。所属しているところが、ボランティア活動を後押しするような地域づくりを行うことが大切ではないか。要望があれば、JAとしても積極的に協力したい。
- (委員) 学校の意識改革を図っていきたい。「みやぎ子ども教育週間」の中で本事業の取組を発表する場を設け、事業推進の気運を高めていきたい。
- (委員) 長い目で見ると、学校のために何かをするのではなく、ボランティアにもメリットがあるというように、両方にメリットがなければ長くは続かない。各地域がやりたくてやるようになり、その結果として本協議会がなくなるのが理想である。
- (委員) 学校とは何か、教育とは何かという根本的なことを考えさせられた時間であった。多くの応援団が存在するので、どうつないでネットワークをつくっていくのかという手続きが問題ではないかと思う。

※ 課長あいさつ